

みんなでトークオーバー 人権こども塾文化祭2024

日 時:2024年11月3日(日)13:00~16:00

場 所:鳴門教育大学 講堂

主 催:鳴門教育大学生徒支援センター・SAG徳島

T-over人権教育研究所・人権こども塾

第3部 会場みんなでトークオーバー

《進行 森口健司》

時間が来ましたので、「みんなで語ろうトークオーバー第3部」を始めます。

昨年、第1回人権こども塾文化祭を文化の森の21世紀館でやりました。その時も、中高生の語りに癒され、本当に元気をもらいました。私が中学校の教員になって43年目になるんですけど、癒され続けています。毎回会うたびに、語る度に成長する姿に感動します。今日も、語りがしみ込んでいきました。

車椅子で昨年も来ていただいた方が、今回も参加していただきました。どうしても時間的に施設に帰らなければいけないということで帰っていただいたんですけど、元小学校の校長先生です。やっぱり、中学生・高校生の言葉に、本当に心が熱くなる。本当に元気になる。そんなよろこびを噛みしめて帰られました。

60分間、本当に思いがあふれる時間になればと思います。冒頭の、人権こども塾のメンバーの言葉に重ねて、また参加した皆さんのお話にも元気になります。フロアの皆さん、マイク係も居りますので、思いを共有できたらと思います。それじゃあ挙手をしてください。早くしゃべらなかったら、多分、後半はマイクが行かんようになると思いますから、手を挙げる方は早く挙げて頂いたらと思います。特に県外からおいでた先生方いかがですか？早くしゃべっていただいたらと思います。じゃあ、いきましょうか。

《香川県坂出市 宮内宏和》

こんにちは。香川県から参りました。全く何も考えていないところで、最初にしゃべった方がいいなというような勇気を、実は去年頂いたんです。ユヅキ君かな。今日は来てないのかなと思いながら。彼が去年ここで、「何で差別はなくならないか」わかつてないことをわかったことにしてしまっているからという語りに、全くその通りだなと強力に感じたんですね。

ちょっと長くなりますが、簡単に言いますと、去年の11月にこの会でハンセン病の話を聞きました。実はその2日後、3年生を相手にハンセン病の授業をする予定だったんです。まあ、びっくりしましたね。知らないことばかりだったんです。会場には、ハンセン病をずっと30年間治療をしてこられた専門医の方もいらっしゃいましたので、ユヅキ君の言葉を聞いて、これは何かせないかんなと思ったので、その方にメールをお届けましたら、すぐにメールが返ってきました。

知らないことをそのままにするんじゃなくて、それからびっくりするようなハンセン病のことを知りました。今日もそうですね。LGBTQも、何か知っているつもりでいて、今日、ここに来ていろいろ聞きながら、実は知ったつもりになっていて知らなかつたことって多いんですね。

LGBTQについては、頭に浮かんだことを伝えさせてください。孫が3人いるんですけど、一番上の孫がとてもたくましい女の子です。金比羅山の380段を2歳の時に上がったんですね。「こいつどんなたくましい女の子になるのかな」と思ったら、最近フリフリ路線に行っちゃいまして、キックバイクなんか大好きで、キックバイクでいろいろ回りながら、彼女に「格好いい」と言ったんですね。

そしたら、ボクの所にやって来て、「女の子は可愛いだろう」と言うんですね。さあ、彼女はこれから先、ボクの前でどんなふうな女性に成長していくのかなと思いながら、彼女の個性を大事にしてやりたいなと思っています。

そんなような素朴なことをお伝えして、何かメッセージいただけたらなと思って聞いていました。全くまとまっていますが、今日もいろんなことを勉強させてください。ありがとうございました。

《進行 森口健司》

ありがとうございました。いろんな思いを語っていただいて、みんなが一つになる時間になればと思います。前の方から何かありますか？

《SAG徳島 葛西真記子》

ありがとうございます。実は幼稚園から、男は男らしく女は女らしくっていうのが刷り込まれて行っている感じがするんですね。それは、テレビとかメディアもそうだし、多分皆さんを見ているテレビだったり、あるいは大人の世界の親の話とか、いろんなところから、「女の子は可愛い」「男の子は格好いい」。そういうなかつたら違うみたいのが入ってしまっているんですね。

そうじゃなく、「自分らしく、みんなが好きなものは好きだと言えるようになって欲しいな」と思うので、幼稚園とかに行っても、「いろんな遊びが好きな子がいてもいいんじゃないの？」というようなことは言っていますけど、地域、学校、社会、家庭、いろんなところを少しずつ変えていかないと、と思います。

フリフリが好きな女の子がいても、それはそれで全然いいし、嫌いな女の子がいてもいい。格好いいのが好きな女の子がいても構わない。いろんな子がいてもいいという、そういう社会になれるように活動していくたいなと思います。

《進行 森口健司》

知ることと交流することで、本当に世界が広がっていきます。今日も第1部で、手を挙げて自分を伝える。そういう体験を通して、私たちが成長していくんだと思います。いかがでしょうか？じゃあ、いきましょう。

《香川県三豊市 薦田耕作》

語りではないんですけど、と思うので質問になるんですが、先ほどの塾生の方の語りと、SAG徳島の方の話の中で、ちょっと疑問に思ったことが1点あるんです。

解消して帰りたいなと思うので質問になるんですが、最初の塾生の方の語りの中で、集団カウンセリングということを言っていましたね。それはわかるんです。語り合いの中で次第に元気になってくる。終わった時には、また頑張ろうなという気持ちになる。まさに集団カウンセリングだと思うんです。

後のSAG徳島の方の話の中で、グループカウンセリングというのがありましたね。内容的には全く違うものではないかなと、私は思うんです。どういうふうに集まって、中身としてどういうようなことされているのかということを、具体的に言っていただけたら、そういうやり方は有効なんだなということもわかるので、すみませんが、何か例をお願いしたいと思います。

《進行 森口健司》

お願いします。

《SAG徳島 葛西真記子》

はい、グループカウンセリングは、当事者のグループカウンセリングと、家族とか支援者のグループカウンセリングもしています。

グループカウンセリングは、カウンセラーがいるんですね。それからカウンセラーをサポートするファシリテーターという人もいます。何でも話したらいいんですけど、例えば「相手を傷つけない」とか、みんなが必ず言わなければならないということもない。言いたくない人は言わなくてもいい。それぞれの方々のそ

こにいる存在を配慮しながら、リスペクトしながらいろいろなことを話す。

そうした心のカウンセリングだと、自分が困っていることとか悩んでいることとか、あるいは、学校だったり社会だったり、「いろんなところでこんなことを言わわれています」だったり、「こんなことで困っています」、みたいな話が出てきたり、そのカウンセリングの中で、どう解決していったらいいかなという話が出ることもあるし、当事者の人たちが、「自分もそういう経験をしたこともあるし、こんなふうな対処をしているんだよ」という話も出る。なので、目標としては、みんなが幸せに元気になれる。セクシュアルマイノリティのことをどこでも語れるということでもなくて、誰かに言ったらそれが広がっちゃたりとかするといけないので、そのグループカウンセリングの中では、守秘義務というのがあって、その中でしか語らない。

その中の話は外ではしないというルールとかもあって。それがグループカウンセリングと、集まって話すという集団のカウンセリングと違うところかなと思います。専門家がここにいるので、どうですか。もう少し答えを。

《香川県三豊市 薦田耕作》

悩みだとか、困りだとか聞いて欲しいという人、集まってくださいと言って集めたうえで、今言われたようなことがあるんですか。

《SAG徳島 葛西真記子》

困っていることがない人でも参加できます。例えば、当事者のグループカウンセリングだと、当事者が人が、今日は自分は悩みはないんだけど、誰かほかの人が悩みがあったら、それをサポートしたいな、支援したいなという感じで集まる人もいます。

例えば、全然誰も悩みがないという回もあります。そういう時は、「最近、徳島こんなんだよ」とか、「うちの会社こんなんだよ」という話が出ることもあります。だから、絶対何か悩みを話さないといけないかというと、そうでもない。ただ、悩みがあれば話すし、悩みと一緒に解決していくよ、ということです。

《香川県三豊市 薦田耕作》

会としては、案内状みたいなものを出されて、来たい人が集まってくるという感じですか。

《SAG徳島 葛西真記子》

そうですね。「グループカウンセリングやっています」というチラシを作っていますので、それをいろんなところに配ったりして。

《進行 森口健司》

今のやり取りで、何か。

《人権こども塾 ちーさん水族館》

ボクとしては、会話の中で癒されていくことを「集団カウンセリング」って言ってもいいんじゃないかという話と、ちゃんと医学的というか、根拠に基づいたカウンセリングとはものが違うというか、ボクが言いたいのはどういうことかというと、「話したら元気になるよ」ただそれだけなんですね。そこに根拠もなければ、引用論文もないし、すごい大それたことはないけれど、ちょっとした会話とかを大事にしていこうよということが言いたいことで、そういうことでは、似ているけれども、違うものだし。どっちも大事にした方が、心の在り方にプラスだと思うし、ということです。

《進行 森口健司》

毎回毎回、こども塾でこのメンバーがマイクを握って語る言葉に、癒されるんです。心が熱くなるんです。私はしゃべっていません。しゃべってないけど、塾生たちのその言葉に癒されるんです。元気になるんです。力が湧いてくるんです。

先ほど帰られた車椅子の方もそういう思いで帰っていかれたと思うんです。

全体学習というのが板野中学校で1990年に始まりました。この学習は、中途半端なきれいごとの人権学習、「差別をなくしたいと思います」という言葉しか出てこない学習、自分の本当の思いをさらけ出すことがない学習を何とかしたいという中で、みんながマイクを握って本心を語り合っていく学習になっていったんです。でもね、全員が発言するのは無理です。発言してなくてもいい。仲間の語る言葉が心に沁み込んでくるんです。本心を語る人権学習というのは、やっぱりエンパワーメントです。語った人も語っていない人も力が湧いてくるんです。

夏休みに人権こども塾の一泊研修を実施しました。よろこびが溢れる2日間になりました。岡山県の長島愛生園への行き帰りのバスの中でみんながマイクを握って語っていくんです。その語りに癒されます。夜、みんなでカレーライスをつくって、もう肉がいっぱいのカレーで減茶苦茶美味しかった。そして、そのカレーライスを食べた後にまた語り合うんです。その語りに癒されます。

その場に、板野中学校で出会った今は親になっているお父さん、お母さんが3人参加していました。その3人の中の1人が、中学校当時、全体学習の時にバンバン語る生徒だったんです。他の2人は手を挙げてどんどん語るような生徒ではなかった。でも、その全体学習にいたという体験が残っているんです。ずっと生き抜く力になっているんです。差別を乗り越えていく力になっているんです。それは、まさしく語り合いが培ってきた言葉の力です。それは生きるよろこびとして一人一人の中に生き続けます。よろこびなんです。学年、学校全体で本気で語り合うという大きな大きな舞台をつくっていく意味は大きいんです。本気の語り合いはずっと残っていきます。今日もそうです。鳴門教育大学の講堂の舞台に立ったという体験、本気で自分をさらけ出したという体験、仲間の本気の言葉を聞いたという体験は、ずっと一人一人の中に生き続けます。こういう舞台がある。その場でマイクが握れる。自分の気持ちが言える。これがよろこびです。ではマイクをつないでいきましょう。

《香川県 屋島中学校 栗原誠士》

香川県から来ました栗原と言います。今日はありがとうございました。前半の中高生の語りの、高校生お二人の司会が上手で、びっくりしました。本当に二人、素晴らしい司会で、しかも隙間を埋めるところも素晴らしい司会ぶりだったなと思います。中学生の方も勇気を振り絞ってしゃべっている姿がすごい印象的でした。ボクは中学校の教員をしているんですが、学校に帰ってもやっていきたいなと思っています。

また、人権こども塾の取り組みで、今日も言っていただいたんですが、まだ言っていないことでも、特に入ってよかったなと思えることがあったら、せっかくなので、お一人ずつ言っていただけないかなということと、SAG徳島のメンバーの方も、どういうきっかけで活動されているのかっていうのと、入ってよかったなと思えることを教えて頂きたいです。私の中学校とも、交流できたらいいなと思っています。

《進行 森口健司》

中学生、高校生の言葉って心に染みるんです。入ってよかったという部分を語ってください。じゃあ、いきましょうか。

《人権こども塾 ちーさん水族館》

私の場合は、特に最初は何の気なしにというか、学校に行けてなかった時期、中学3年生の頃で、ふと学校に行って、教室の後ろにチラシが貼ってあって、そのチラシが人権こども塾とか、人権の中学生交流集会どうですかみたいなのが目に入ってきたら、その日付けがたまたまボクの誕生日だったんです。なので、「おっ、いいな」と思って参加したんです。それでいろんなことを学んで、勉強して、最初は友達と3人で参加していたんですけど、高校に入って1人になって、それで一番思ったのは、やっぱりボクが夢があって、誰かを助ける水族館を造るという夢があるから、水族館の勉強をすることは確かに大事なんだけれども、それ以上に人のことを知る。今まで身近にあった人間のこととか、心のこととかということをある程度知った

り、学んだりしたいなということで、ここまで、高校2年の冬までいたというので、人と触れ合い、自分が絶対に会わなかつたような人たちと、直に触れ合って話せるというところにボクは一番魅力を感じています。終わります。

《進行 森口健司》

ありがとうございました。拍手をしましょう。短くしてくれたらうれしいです。さあ、いこう。

《人権こども塾 みお》

私は友達に誘われて、「人権を語り合う中学生交流集会」からだったんですけど、学校では絶対に体験ができないこととかが、ここでは体験できるので、私はそれが一番魅力的だなあと感じています。以上です。

《人権こども塾 かんな》

私は中学1年生の時に参加したんですけど、参加した理由が、1年の1学期に私は、委員会が人権委員会で、それで吉成先生がこういう交流集会がありますというのを紹介していて、その時、人権委員は参加しなければいけないものだと思っていたら、ただの1人しかいなくてちょっとびっくりしたんですけど。でも、この3年間ここに来てみて、学校とはちょっと違うような、一步踏み込んだ学習ということができるので、その点に関して来てよかったです。

《人権こども塾 あすか》

私は、こども塾に入ったきっかけとしては、吉成先生があそこにいらっしゃるのですが、そこにいらっしゃる西浦先生を通じて誘っていただいて、私は中2の頃に入ったので、かんなちゃんが居るよと言われて、かんなちゃんが居るならというのと、他にも友達が入ると言っていたので私も入ってみようかなくらいの軽い気持ちで入って。先ほども言ったように、人と関わることが楽しくなったかなということで楽しいのが魅力だなと思います。

《人権こども塾 あいちゃん》

私は2年生の時に森口先生に誘われて、特に断る理由もなかったので好奇心で行ったんですけど、ちょっと自分で理解できない難しいテーマも無茶苦茶来て。でも、事件とか勉強になって。最近では親と話したりして、深く取り組んでいます。

《進行 森口健司》

餅つきをしたんです。映像も残っていますけど、やっぱり、滅茶苦茶楽しかったね。美味しかったね。はい、じゃあいこう。

《人権こども塾 あーちゃん》

私は中学2年生の時に先生に誘われて、最初は中学生交流集会から参加しました。中学生交流集会は土曜日にあったんですけど、私は土曜日が忙しくて全然参加できなくって、その時に、作文を読んでみるかということで、学校で書いた作文を読んでから参加するようになりました。一泊研修とか、四国朝鮮初中級学校との交流とか、学校では体験できないことができるのが楽しいなと思っています。

《進行 森口健司》

ありがとうございます。会場にはたくさんの中学生も来てくれています。やっぱり「共感と連帯」、そこに生まれる「信頼と尊敬」、そして仲間への感謝です。だから語れるんです。やっぱりクラスによってはザワザワしたり、話を聞いてくれなかつたりというのは、あってはならんんですけど、なかなかしんどいクラスもあつたり、しんどい学校もあつたり、そういうこともあるわけです。でもね、それも何とかしなければいけないんですけど、みんなで何とかしていくんですが、そこに安心がある。信頼がある。そういう中でトレーニングされていくって、語る力がどんどんついていくし、つながる力がついて、本当に世界が広がっていく。私たちを本当に幸せにしてくれる営みです。はい、感想とかでもいいです。どうぞ。

《SAG徳島 メンバー》

そっちでいいですか？しゃべり出したら止まらなくなるので、早口でいきますけど、私自身、性別学的な男性。そして、性自認も男性。一致しています。異性が好きです。まあ、シスジェンダー（生まれながらの生物学的と性自認が一致している人）っていうのかな。まあ、結論を言いますと、私がとても仲が良かった生物学的女性の方から、ある時、今まで付き合ってきた方は全員女性だったと言っていただけて、正直、すいません。ボクはその時、どんな反応ができたかわかつてないですし、今もずっと考えてます。あの時、第一声で何をしたらよかったです。そういうことも知りたかった。勉強をさせて欲しかったというつもりで、こちらに入らせてもらって。私は製薬会社のサラリーマンでもあるので、いろいろお薬って深くて、男性の精液中には移行しないお薬ばかりなんんですけど、女性の母乳には移行するお薬っていうのがあります。なので、てんかんのお薬とか、子どもがちょっと奇形のある状態で生まれやすいとか、そういうのも、女性側の副作用としてあがっています。実は、基礎実験とか、女性のホルモンとかで血中とかへのまわり方も変わってくるので、容量を決める設定とか、全部男性でやっているんですね。一応、有効性とか安全性とかを見る時に初めて女性で見るとかで、そういう男女っていうのも奥深いところもあるので、ごめんなさい、長くなりました。

《進行 森口健司》

はい、ありがとうございました。

《SAG徳島 メンバー》

先程お話ししたんですけど、私台湾人なんですけど、今年4月に来たばかりで、なぜSAG徳島に入ったかというと、私元々ゲイなので、ゲイとして生まれて20何年間も経って、自分のアイデンティティについていろいろ葛藤も抱えつつ、何だろう。いろんな課題も直面していくうちに、自分の性的なことを受け入れられるようになって。それでもまだ、「LGBT」について知らないことばかりなので、この場合は、LGBTの支援団体に入ることになって、やっぱりまだいろんなことを知らないなということを知って。もともと日本の文化だったり、日本の人の、いろいろな人とのコミュニケーションの取り方だったりということに興味があつて日本に留学しようかなと思って、今年来て、この活動に参加することになりました。

《進行 森口健司》

はい、ありがとうございました。

《SAG徳島 メンバー》

ボクも当事者で、気づいたのが遅くて20代後半くらいです。初め、レズビアンかなと思ったんですけど、「やっぱり違うなあ」と思って、身体は女性なんですけど、心が男性で、その時にはまだ、誰にも話してなくて、たまたまインターネットで、何で検索したのか忘れましたけど、「徳島LGBT」かな。検索したら、「SAG徳島」がヒットてきて、それで、お花見があるということで、その時に初めて参加させてもらったのがきっかけです。

そこで、自分も知識が全然なかったので、自分の心もゴチャゴチャしていたし、その時に対応してくれた方がすごく優しくて、初めて自分の居場所を見つけたような気がして、それに感動して、自分も当事者の人たちとも知り合いになって話もしたいし、自分の気持ちも整理したいなということで、SAG徳島の方に入らせてもらいました。ありがとうございました。

《進行 森口健司》

はい、ありがとうございました。本当に、こういう場でなかつたら絶対学べないような出会いやつながりがある。つながりとこの出会いにやっぱり感謝です。人権学習って、本当の自分のことが言えるというのは、こんなに楽になるし、こんなに力が湧くし、こんなに自分が好きになるし、人が好きになる。そんな語り合

いが、この後30分くらいですけど、広がったらなと思います。どうでしょうか。いきましょうか。2人まだしゃべっていないので、しゃべってもらいます。

《人権こども塾 げんき》

ボクは、人権こども塾のことになるんですけど、今まで学校の授業とかで人権学習をやって来たんですけど、やっぱりどこか、誰かがふざけているとか、全員が集中していないんで、絶対話し声があつたりとか、寝てる人がいたりとか、そういう空間で人権を学んできたので、関心というのがあまり深まらないというのがあつて。

人権こども塾に入って、そこにいる1人1人が人権の授業とかも真面目に受けていたから、真剣な空気っていうのを作り出せるし、1人1人語ることによって、ボクも刺激をもらって手を挙げて語ることができるので、人権こども塾はボクにとって一つの転機となった、非常にいい場所だなと感じています。ありがとうございました。

《進行 森口健司》

皆さんね、やっぱり闘いなんですよ。伝えていくという闘いなんです。それはね、しんどいです。自分をさらけ出すというのは。でもそれを聞いてくれたら、無茶苦茶力が湧くんます。きれいごとでずっと流れている。ひとごとでずっと流れている。聞いてもない。関心もない。そういう人たちに伝えていく。そういう人たちの心を搖さぶっていく闘いなんです。私は、教師としてやっぱり原点は部落差別なんです。差別意識をぶつけるようにしてきたお母さんに、必死に私自身を伝えていく。これを聞き流したら教師でなくなる。教師をしよる意味がなくなる。自分自身をさらけ出していく。どうして教師をしているのか。自分を伝えていく。部落出身という立場を伝えていく。こんなことを言う必要はないはずと思っていた。

でも、ここでこのことを語らなかつたら、自分は教師になった意味がない。語った時に伝わっていくんです。本気で伝えた時に子どもたちの心に響くんです。そういう子どもたちが増えていくんです。そういう本気の仲間の教師が増えていくんです。そういう闘いなんです。それはね、なかなかしんどいクラスがあるかもわからん。やっぱり無関心な子、聞いてない子。そういう中で話し続けるというのは、エネルギーがいります。しんどい。でも自分なんです。自分に問い合わせていくんです。自分に何ができるか。伝わるかは相手の勝手です。そんな1回1回の学びを通して、自分がこんなに成長していく。そういう自分をまた豊かにしていく場として、1回1回の人権こども塾があるということによろこびを感じます。では、いこう。

《人権こども塾 こかわ》

ボクは今年こども塾に入ったんですけど、変わったことが2つあります。1つは、人と話すことが好きになつたことです。人権学習の語り合いで、自分のことを言うのが得意になつた気がして、今まで、ボクは人と話すことが苦手で。けどこども塾に入って、自分のことをたくさん言えて、人とのコミュニケーションが得意になりました。2つ目は、人権学習が生きる糧となつたことです。今まで自分自身の力に自信がなかつたけど、人権学習で心が楽になつた気がして、自分の力に自信が湧いてくるようになった気がしたんです。だからボクはこれから人権学習を、生涯学習として過ごしていけたらいいと思います。ありがとうございました。

《進行 森口健司》

昨年の人権文化祭の時も、中学生・高校生の言葉にずっと癒された。中3ですよ。人権学習が生きる糧になつたって言いきれる中3です。格好ええわ。やっぱり、そういう格好いい子どもたちと巡り合っていく。どんどん語る力がついていく。それは人を大事にする力です。それではつながっていきましょう。薦田先生、お願いします。

《香川県三豊市 薦田耕作》

私たちもですね、三豊市の方で、「中学生の人権について語り合う交流集会」を始めて今年3年目になります。3年目の今年、今日、こども塾の1部の進行をされたちーさんとみおさんも来てくれていましたよね。それであの後、会の報告書を送ったんですけど読んでくれました？私はあれを読みながら、一つ思ったことがあるんです。

何かというと、本当に読んでくれました？最後に子どもたちの感想を書いていたでしょう。何と言って三豊市の子どもが書いていたかというと、「徳島から来られた高校生の意見を聞いて、LGBTQや障がいは個性なんだということがわかつて、私はスッキリしました。」と書いている子が1人や2人ではないんです。たくさんいるんです。悪いんですけど、私はその子たちを集めて事前に話をして、そんなことも私の口から言っているんです。

けど、私が言った時には心に残らずに、お二人が言われたことは心に残っているんです。何が違うのかと言ったら、森口先生が言われるように、その言葉を言うベースがすごいんです。それが、全部三豊市の中学生に伝わったかどうかはわかりませんけど、そこをベースにして語ったら、三豊市の中学生があの日初めて会ったんです。けど、お二人の言葉にすごく感動して、いっぱい感想文にそのことを書いているんです。そういうことは誰でも言うでしょう。「障がいは個性だ。それぞれの個性の問題だ」と。

私が言っても響きませんが、彼らが言つたら響くんです。今日は、そういうことをベースにしながら、私は逆のことを考えていたんです。人権こども塾、徳島の子どもたちはすごい。そう思っていたんです。でもね、よく考えたら、三豊市の中学生とある意味一緒じゃないか。この言葉が適切かどうかわかりませんが、ずいぶん初歩的なことを言っているなというふうに感じたんです。

どういうことかというと、「授業中騒がしい」とか、「先輩のように自分は上手く夢を語ることができるか不安である。」また、二人の答えがすごいでしょう。「授業中騒いでるやつらにも良いところはあるよ。」その悪いところばかり強調して見たら人間関係って悪くなる一方じゃないですか。でも、良いところもあるよ。そこも見なければというメッセージがなされて。夢に関しては、確固としたものがなくてもいいんだ。ふわっとしていてもいいんだというようなことを言われて、返す言葉がなかったんです。

私は来年、また三豊市の方で語る会をしようやということで、4月の段階で実行委員会を立ち上げて、募集して集めるんですが、その時に言います。「確かに徳島の中学生集会をめざして私たちはやって来た。でも、一緒に」と、今日聞いたようなことを言いたい。でも、去年みんなが思いを寄せたちーさんは休塾だそうで、頑張ってください。そういうことを言いながら、また三豊市の方で徳島の皆さんとつながるような取り組みを私はやっていきたい。それを言うために、私は今日来ました。ありがとうございました。

《進行 森口健司》

子どもたちがね、やっぱり憧れるんです。ずっと不登校で学校へ行けなかつたちーさんが語る言葉に憧れるんです。それでこども塾に入るんです。ちーさん、あなたはすごいです。有井が今日は来れていないんですけど、彼が自分の父親を「格好いい」と言う。その語る彼が格好いいんです。やっぱりその言葉が心に沁みるんです。みおさんが学校の先生になりたいと言う。やっぱりその言葉に力をもらう。やっぱり、こども塾やって良かったなあって、吉成さん、思うよね。中学生、高校生に、癒され励まされ、日常があるんです。はい、じゃあいきましょうか。どなたでも。はい、じゃあいこう。

《八万中学校 男子》

さっき、講演を聞いて、人にはいろんな個性があって、それは否定してはいけないものなのだと、改めて感じました。

《進行 森口健司》

八万中学校すごいな。この場で、この会場で手を挙げてマイクを握るというのはとんでもないことですよ。

じゃあ、いきましょう。どうぞ。(数人の手が挙がり)じゃあ、順番で行きましょう。

《八万中学校 女子》

私は去年人権こども塾でいろいろと学ばせていただいたんですけど、久しぶりにマイクを握るのはちょっと緊張はしておりますが、今回L G B T Qが主に議題とされていたので、「これは私行かねばならぬだろう」と思いました。私が人権をやったり、人権こども塾に入ってみたいなあと思ったのは、お菓子が理由なんですけど、とても美味しかったです。それも一つで、もう一つは、前の2人と同じで、西浦先生から誘われたんですけど、その中1の頃に人権作文を発表する会みたいなのがあって、私はそれに「L G B T Q+」について書いたんです。

なんか中1で、小学生の頃にまともに人権も勉強していなかつたし、すごいバカだったんで、「人権」がすごい面倒くさいものだと思っていて、その人権作文も1~2時間で、バアーッと書き上げたものだったんです。だからクラス代表のやつを選ぶとなって、先生が何人かの作文を指して、それで前に呼んでもらって、この中から選びましょうってなるんですけど、まさか自分が名前を呼ばれると思ってなくて、すごいなんか話し言葉も多いし、何を書きたいんかわからんやつで。

すごい拙い文章だったのに、その西浦先生のやつでクラスの前で発表して、この中から選びましょうとなつた時に、クラスのほとんどの人が私の作文がいいみたいに書いてくれて、すごい嬉しかったです。1~2時間でバーッと終わらせて、何を伝えたいのもかわからない文章に、「文章良かったよ」とか、「心が動かされたよ」とか、そんな嬉しいことを言われたら嬉しいじゃないですか。すごい嬉しくて、その人権発表会の場で、多分、私6クラスある中で4~5番目くらいに読んだんです。

他のクラスの子もすごいいいことを言っているし、「ワアッ、どうしよう。こんな拙い文章で、読むの無理や」みたいに思ったんですけど。その人権作文発表会をする前に順番を決める時に、打ち合わせとかするんです。その時に、みんなすごい真面目なことを書いてるから、他のクラスの選ばれると子とかに、「この作文いけるかな」とか、「ちょっとこの文章、話し言葉ヤバイけん、もうちょっとましな、人さまにお聞かせできるくらいの文章にするにはどうすればいい?」みたいなことを言って、始まる5分くらい前に直そうとしたんですけど、そんなのできるはずもなく、結局そのまま4~5番目くらいに始めたんですけど、すごい緊張しましたね。やっぱり。マイクがちゃんと通っていなかったんです。

初めから、「終わった」と思ったんですけど、終わったあと、すごい拍手されて。教室に帰ったら、「すごかつたよ」と言われたり、次の日とかにも、他の家庭科の先生だったり国語の先生だったりから、「すごかつたよ。あんた」「話しかけ方、伝え方もすごかったよ」って言われて。国語の先生ですよ。国語の先生から褒められたんですよ。私、もう、すごいじゃないですか。そんなの。

そこから「ワアッ、楽しい!」ってなっちゃって。だから、今回久しぶりに人権のやつで来たんですけど、すごい楽しいです。どうもありがとうございました。

《進行 森口健司》

楽しかったです。よかったですよ。めっちゃよかったです。はい、いこう。

《八万中学校 女子》

先輩方2人が夢について語っている姿を見て、私も、ちょっとしゃべってみたいなと思ったのでしゃべらせてください。私の夢は、みお先輩と一緒に、教師です。理由は、いろんな先生と出会って、その人たちに影響されたっていうのもあるんですけど、一番の理由としては、まず中学1年生の時に人権全体学習があって、「ええっ? 何それ」という感じになって。行ってみたら、「こんなものやるんじや」みたいな、最初はそんな感じで。

最初は、ほんまに「だるいな」とか「面倒くさい」と思って、周りの子もそんな感じで言っているから、

自分も流されたっていうのもあるんですけど。中学2年生の時に、吉成先生に「中学生交流集会に行ってみませんか?」と結構誘われて、興味本位で「行ってみたいな」ってなったので行ってみたら、いろんな意見を持った人がいたし、いろんな人がいて。こんなに大勢の前で堂々としゃべれるのが、私には「すごいな」という感じで。私は人の前でしゃべるのが苦手だし、人の意見と違ったらどうしようってなることが多いです。ジェンダーの話もそうだし、部落の話もそうだし。自分の感じていることとは違う人がいるじゃないですか。そういう人と違うことで、私は自分の意見が間違っていると感じちゃうことが多かったです。でも、吉成先生の全体学習とか、私の学校のみんなの意見を聞いて、人権には間違はないということがわかりました。

私は人権には興味はなかったけど、だんだんと興味を持ってから、私の経験したことを未来の生徒たちに教えたい。そういう気持ちになったので、私は教師になりたいと思いました。ありがとうございました。

《進行 森口健司》

ありがとうございます。アツという間の60分です。あと1人か2人です。これだけ言われたら、しゃべらないかんわな。では、いこう。

《八万中学校 教員》

失礼します。八万中学校の教員をしております、西浦と申します。今日はハンドボール部を通じて参加させていただいたんですけど、担任をしていた生徒に、1年生の時に一緒に参加しないかと言いかながら、土日にあるので、私自身がなかなか参加できなかつたりとか。参加できたのは1回か2回か数える程度で。1年生の時に誘って、さっき聞いたんですけど、人前で堂々と話したりとか、彼女らはずつとあんな感じなんですけど、人前で手を挙げて発表するというのは最初からはなくて、おとなしくて落ち着いた子やなという感じの子だったんですけど、それが人前でこんなに堂々と話をしていたりとか、八万中学校の卒業生も、司会でしっかり堂々と役割をこなしている姿が、見ていない間に積み重ねたものが、今日こうしてあって。

私も人権学習を、今、3年生と全体人権学習としてやっているんですけど、知らないことも感じ方が違うので、「こういうこともあるなあ」と思うことや、「そういう考え方もあるなあ」と気づかされることもあるので、自分だけでおさめず、しっかり発信したりとかが大事だなと思うし、子どもたちにも「しっかりぶつかり合う勇気と、受け止める力を持ちなさい」という話をしています。

しっかり話して、一方通行ではなくて、受け止めてどう考えるのかとか、それを伝え合うというのを、やっぱり大事にしていきたいし、私が教えるというよりは、教えられることも人権学習ではたくさんあるので、共に学ぶ、共に行動するっていうのが大事だなあというのを、今回改めて感じさせていただいたので、これをまた、学校に持ち帰って学んでいきたいなと思います。ありがとうございました。

《進行 森口健司》

ありがとうございました。もう時間なので、(フロアーに何人かの手があがり)では、お二人の発言で終了します。

《フロアー 一般参加》

先回のバーベキューから2回目の参加で、ほとんど初参加なんんですけど、もちろんマジョリティへの啓発っていうのも大事なんんですけど、それ以上に、マイノリティの当事者の人へのエンパワメントというのが本当に大事だと思っていて。例えばさっき紹介してくださったいろんなマイノリティが登場する作品については、もちろんマジョリティがマイノリティについて考えていくというのはあると思うんです。けど同時に、当事者が、自分はこういう生き方があると見つけたり、自分はこういう自分のままで生きていいんだよということが、何かの形で発見できるというか、許されるっていうか、救いになるんです。

作品もそうだし、同時にこういう場所を用意してくださることは、当事者にとっても救いだし、癒しだし、

歴史的な話だと、2018年にお茶の水女子大学がトランスジェンダーを受け入れますよって言ってから、ネット上のトランスジェンダーへの差別的発言というのはすごく激化していったんです。私はネットにそんなに触れてなかったんですけど、私に見えている世界っていうのは、たくさんのトランスジェンダーの当事者が瀕死で横たわっているっていう状態なんです。

その中にまだ生き残っているという世界観っていうか、イメージがあって。何て言うんだろう、たくさん差別によって殺されてきた人たちがいる中で、私自身がなぜ生きて来れたかというと、例えば、家族にカミングアウトしても受け入れられたとか、さっきの作品とか情報の中で、自分はこういうふうに生きられる道があるんだと知れたから。差別は人殺しだし、逆に、差別に立ち向かっていく、差別に抵抗していくという文脈をこうして作りだしてくださるっていうのは、本当に、何て言うんだろう。人助けというか、命を救うものだと思っています。本当にありがとうございます。

《進行 森口健司》

ありがとうございました。今日の出会いは一生ものです。では、最後ですね。

《八万中学校 男子》

ボクは、高2なんですが、ちょっと小学校の時にいじめられてて、その時に助けてくれた人が、身体は女の子なんですが、男の心を持っていて、どう接したらいいんだろうっていうのが、ずっと悩んでて、それってどうしたらいいですか？

《壇上のSAG 徳島メンバーA》

じゃあ、ごめんなさい。ううん。ボクも勉強をして、何だろうな。総じて言ったら個性だから、その人として接してあげるのが、多分一番いいと思うんですね。男だからこういう接し方、女だからこういう接し方じゃなくて、友達とかと接するような感じでいいじゃないかな。すいません。答えになっているかな。

《壇上のSAG 徳島メンバーB》

ボクは当事者というか、さっき悩んでいた人と同じなんです。そのパターンと。ボクは、そうですね、ありのままを受け止めてくれたら全然嬉しいし、特別にこうしなきやいけないとか、ああしなきやいけないとかじやなくて、ありのまま話を聞いてくれるだけでボクは嬉しいです。

《SAG徳島 葛西眞記子》

何に戸惑っている、困っていると言ったかな。それをそのまま伝えてもらつたらいいと思うんです。だって、すごく仲良くしたいし、ありがたいと思っているし、これからも付き合いたいけど、自分はどうしたらいいかわからないかな。どうしたら一番2人にとって楽かなみたいに話せたらいいかなと思います。終わります。あとで個人的に聞いてくれてもいいです。

《進行 森口健司》

ありがとうございました。本当にあつという間です。鳴門教育大学の講堂を使わせていただいたこと。葛西先生、本当にありがとうございました。夢のような舞台です。本当に、こういう交流ができたこと。これだけ熱い思いに触れることができたこと。やっぱり感動です。語り合いの人権学習は全てを変える。まさしくそうなんです。信頼と尊敬の絆の中で生きる仲間の関係って、家族の関係って、やっぱり嬉しいです。よろこびです。

この本は「学校を変える被差別マイノリティの子どもたち」の特集です。これは『部落解放』という雑誌なんんですけど、この中に昨年度の人権こども塾の取り組みがずっと紹介されています。子どもたちの輝いた姿があります。

こども塾で、絶対語れないことを語り、自覚し、家族が本当に幸せになっていく。そんな世界が紹介されています。ぜひ、読んでいただけたらと思います。思いが素直に語られています。その言葉と言うのは、本

本当に元気が出ます。今年の夏休みに、長島愛生園でハンセン病の一泊研修をするということをやったんですね。その時に香川から2人の先生に来ていただける。今日も来ていただいているけど、こういうつながりが何とも言えません。今日、本当に深くつながれたこと。SAG徳島の皆さんとの交流。また、どうぞよろしくお願いします。以上で2024年度の人権こども塾文化祭、これで終わらせて頂きます。

集まってくれた皆さん、ありがとうございました。

一生懸命思いを伝えてくれた皆さん、ありがとうございました。

以上で全ての行事を終わらせていただきます。ありがとうございました。終わります。